

編集後記

6月のはじめの宇都宮の第22回日本リハビリテーション医学会を控えて読者の皆様も何かと心せわしいことであろう。新緑の季節から入梅へと移る頃合に新しい本誌をお送りする。

本号の特集は精神薄弱児のリハビリテーションである。「総合リハビリテーション」と銘打ちながら、つつい医学的リハビリテーション、それも運動障害をもつ人々のそれに片寄りがちな本誌にしては、このようなテーマをとりあげることは、誌名にふさわしい適切なことと考えられる。特に今回の特集は広い分野の方々に御執筆いただけたので、精神薄弱児あるいは精神遅滞児(MR)のリハビリテーションの諸問題に、かなり異なった大多数の角度から新鮮な切込みを入れることができたと思っている。

まず有馬氏・他には医学的な立場からのMRの分類・成因・臨床像について詳しく説明していただいた。ついで池田氏にはMR児の運動発達の特徴を、その療育との関係において論じていただいた。佐々木氏のMR児の社会的リハビリテーション(通園施設を中心に)も、武村氏の重度自閉症児のリハビリテ

ーションも、ともにいわば現場からのレポートであり、それをふまえた現実的な論議である。最後の皆川氏の当事者団体の立場からのMR者のリハビリテーションは「児」だけにとどまりえず「者」にまで及ぶMR全体のトータル・リハビリテーションについての貴重な問題提起である。

本号ではこの他に、講座として、リハ医に必要な全身管理の第6回「泌尿器合併症」を森田氏に、機能修復の第2回「脊髄損傷の機能回復」を柴崎氏にお願いした。いずれも基礎的な知識にして重要なものである。

巻頭言で御巫氏からいくつかの重要な提言をいただいたが、中でもリハビリテーション科の標榜科目としての公認は学会をはじめ関係者が全力をあげてとり組まなければならない課題であろう。幸いに今回の学会では、高橋会長のもと、画期的な社団法人化が実現するはこびになると聞いている。新法人の最初の課題の一つがこの問題であろうし、読者諸兄ともども編集子もこの点についての努力をつみ重ねていく責任を痛感している。

(上田 敏)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告(第13巻 第7号)

特 集 四 肢 麻 痺

四肢麻痺の特集にあたって……………産業医大 緒 方 甫
リハビリテーション医の立場から

みた四肢麻痺……………神奈川リハセンター 伊 藤 良 介・他
整形外科の立場からみた四肢麻痺…………山陰労災・整形外科 新 宮 彦 助
泌尿器科の立場からみた四肢麻痺…………総合せき損センター 岩 坪 暎 二・他
小児療育の立場からみた

四肢麻痺……………神奈川子ども医療センター 井 沢 淑 郎

巻 頭 言 随意運動と運動学習……………奈良医大 眞 野 行 生

研究と報告 脳炎および髄膜炎後遺症の運動機能の

発達(回復)過程とその問題点……………金沢大 野 村 忠 雄・他

調 査 一国立療養所における脳卒中リハビリ

テーションの現状……………東埼玉病院 里 宇 明 元・他

短 報 脳卒中後片麻痺患者における Aerobic Threshold,
Anaerobic Threshold 測定の可能性に

ついて……………産業医大 吉 田 豊 和・他

講 座 リハビリテーション医に必要な全身管理

7: 肝機能障害……………大田区大田病院 沢 浦 美 奈 子

機 能 修 復

3: 骨・軟骨損傷の回復過程……………東京都養育院 林 泰 史

一 頁 講 座 義肢のパーツ

7: 義手の分類と部分品……………川崎医大 明 石 謙